

連載

## 実験的教育論 [4]

## 宗教教育は不可能か

まちだそうほう

東京外国語大学教授 町田宗鳳

不足がないことが、最大の不足である

戦後教育の大きな特徴の一つは、きれいさっぱりと宗教と縁を切ったことである。民主主義の定着には、宗教教育は支障となると判断した占領軍の政策に拠るところが大きい。それにしても民主主義の旗頭を標榜するアメリカという国に強い宗教臭が漂っているのは、皮肉なことだ。

日本でも宗教組織が母体となっている私立学校では、その宗教の教義を教えることも可能なはずだが、最近はその宗教の教義には行われていないようだ。一般学生の不評を買いたくないからだろう。ましてや公教育の場となれば、憲法上の制約もあるので、宗教教育はご法度となっている。

それは正しいことだと思うが、かといって教育の中からまったく宗教的な要素を抹消してしまってもいいものか、私は大いに疑問に感じている。別に神仏について語らずとも、万物に感謝する心、人に親切にする心、他人の幸せを願う心などの大切さは、教えられるはずである。人間として、そのような利他の精神を培うこそこそが、教育の本来の姿だと思うのだが、いつのまにやら知

識や技術を供給することだけが、教育の定義になってしまっている。

もっとも、利他的な徳目を教条主義的に教室に持ち込んでも、あまり意味がない。むしろ、そのように他者を思う心を抱くことの楽しさを実際に味わうことが優先されるべきだ。そのような状況なるべく自然な形で作っていくには、どうすれば良いのだろうか。それを創意工夫するのが、プロの教師の腕の見せどころというものである。

実験的教育論者を自認する私なら、どうするか。さしずめ週に一度、「ガマンの日」を設けるかもしれない。たとえば、全員昼食抜きの日を作る。弁当も給食も禁止。昼休みには、水でも飲んで過ごしてもらう。育ち盛りの子どもたちに、そんな無茶なことはさせられないと言われるかもしれないが、それでは世界で少なくとも数百万人の子どもたちが今日も一食もありませんでいる事実をどうするのか。その人たちのことを思いながら、ガマンするのである。毎日、食事を与えられていることの有り難さを身に沁みて理解するためには、ひもじさを体験するのが一番である。

だいたい現代っ子の問題は、栄養不足ではなく、栄養過多であることだ。アメリカ政府は、肥満を国家的危機

の一つとして認めているが、日本もファーストフードに馴染んだ子どもが増えれば、やがてアメリカの轍を踏むだろう。だから、一回昼食抜きにただけでも、健康になる子が出てくるかもしれない。私もときどき三日断食や一日断食をするが、そのほうが、かえって体の調子がいい。

エアコンを使わない日があってもよい。暑さ寒さをひたすらガマンするのである。夏は汗をかいて済むかもしれないが、冬の寒い日に風邪を引かせたらどうするか。父兄がいつべんに苦情を申し出てくるに決まっているという懸念がある。たぶん、そうだろう。今は子どもたちよりも、親の教育が必要な時代だから、学校の先生もたまったものではない。

しかし風邪を引くのは、あくまで本人に抵抗力がないからであって、教師の責任ではない。本人が一日ぐらい暖房がなくても風邪を引かないような体に鍛えるより仕方ない。暖房が切れた日には、乾布摩擦でもすればよい。決して暴言を吐いているわけではなく、私自身が虚弱体質だったにもかかわらず、自分で禅寺に入って体を鍛えた人間だから、そう言えるのである。そもそも風邪を引くのも、悪くない。野口整体を創めた野口晴哉氏

は、『風邪の効用』という本まで著して、人間は風邪をひくたびに健康体になっていくと主張したぐらいである。

生活の快適さを知るのは、その快適さを失ったときである。時々暑さ寒さぐらいガマンすることがなければ、人間は馬鹿になる。現代日本社会の弱点は、不足がないことである。モノが満ち溢れているから、国民は生活への満足感も感謝の心も、持たなくなっている。不足がないことが、最大の不足なのである。

文房具を持たないで登校する「ガマンの日」があってもいい。ノートや鉛筆がないまま、学校に通っている子どもが途上国には無数にいる。彼らと同じ環境を体験してみるのである。日本では、先生が黒板に書いたことをノートに写すことを勉強だと思っている子がいるから、それをできなくするだけで、記憶力、思考力、発言力に改善が見られるかもしれない。

日本人は書かれた文字に依存しすぎている傾向があるが、耳で学ぶことも大切なのである。私が中年になって米国に留学し、初めてハーバード大学の教室に納まつたとき、教授たちが全然、板書というものをしないことに戸惑った覚えがある。日本人が外国語の習得が苦手なのも、書いた文字を覚えようとするからである。

ひたすら温室的環境を子どもたちに提供することが愛情だという思い込みがある現代日本で「ガマンの日」を実行するには、さうとう勇氣がいることだが、その理念を明確にして、教師と父兄と子どもたちの相互理解の上でなら、不可能ではない。ついでに、その「ガマンの日」には、不要な衣類や文房具を持ち寄って、途上国で貧困に苦しむ人たちに送ることにすれば、一石二鳥の教育的効果がある。

要するに「ガマンの日」とは、仏教でいう「少欲知足」を具体的に体験する方法の一つにしか過ぎない。仏教には「少欲知足」という教えがあるから、それを尊重しよう、もつと仏教を信じようと言えば、公教育の偏向になる。しかし全校的に「ガマンの日」を設けて、ガマンを知らない子どもにガマンすることの大切さを体験させれば、宗教という言葉を一言も語らなくても、「少欲知足」を実践したことになる。現代の宗教教育は、さういうものであらなくてはならない。

### 敬虔感情を育てる

宗教とは、自分よりも遙かに大きな存在に敬虔な感情を抱くことである。現代文明の傲慢は、人間が人間を見

ることしかしなくなつたことに起因している。目線がいづも横にだけ動いて、眼球を上下に動かすことを忘れてしまつてゐる。

若年層によるネット自殺や凶悪犯罪のニュースを聞くたびに、何に対しても敬虔感情を抱くことのできない世代の悲哀を感じてしまふ。彼らに、人間よりも遙かに大きな存在に厳肅なものを感じる経験が一度でもあれば、果たして自分や他者の生命をあやめるような行為に走るものがあつただろうか。

太陽や月を眺めて、あるいは海や山を望んで、何かしら体がワクワク、ゾクゾクするような感覚を味わうことが、教育の出発点である。そのような機会を子どもたちに与えるには、まず教師自身がそのような「ワクワク、ゾクゾク」体験を日ごろから重ねていなければならない。自分に感動体験がないのに、他者にそれを求めるのは無理な話である。だから私は以前にも書いたように、学校の先生たちに、もっと遊び心をもってほしいのである。

じつは今、私は外務省の委託事業でブラジルに講演旅行に出かけ、その帰りの飛行機の中で、この原稿を書いている。講演の後、少し時間的余裕ができたので、世界一のイグアスの滝まで自費で出かけたのだが、滝に巨大

な円形の虹がかかつていた。世にも不思議な光景である。自然の美しい風景をうっとり眺めることの楽しさを、われわれ親や教師は子どもたちに教えてきただろうか。何も世界的な観光地に行かなくても、自分たちの周囲にも感動の風景は、いくらでも転がっている。自分たちが駆け足で生きているからといって、その意味のない駆け足に子どもたちまで道連れにしてしまうのは、大きな罪である。

人間がどれだけ足掻いたところで、自然の偉大には及びもしない。そのような非力を自覚した上での文明の進展である。幼少の頃から、自然の美に感動する機会も与えずに、やたらと知識を詰め込もうとするのは、親や教師の身勝手である。知識が大切なことは言うまでもないが、知識というのは、豊かな情操という土台の上に置かれるべきものだ。でなければ、知識は人間の心を冒すゴミとなる。少しキツイ言い方をすれば、心を置き去りにしたまま与えられる学校教育の知識の大半は、産業廃棄物に近い。

情操教育といえ、今度は子どもたちにピアノやバレエを教えることと早合点する親がいるかもしれないが、私に言わせれば、真の情操教育とは、金のかからないも

のである。自然の中で泥んこになったり、木に登ったりするのには、どれほどの投資が必要だろうか。先月号で自然農法的な教育について語ったが、子どもが幼いうちは、極力、人為的な要素を持ち込まないほうがいい。文字通り太陽と水と土があれば、子どもは育つのである。親や教師の責任は、そのような環境を提供するだけである。

汚染されていない太陽の光と水の清明と土の温もりを感じさせることが、しっかりとできていれば、その子の未来は明るい。俗に「夏の間、十分に潮風に当たっておけば、風邪を引かない」と言ったりするが、同じことが人生についても言えるだろう。

神社やお寺に出かけて、賽銭をあげ、願掛けすることが宗教ではない。宗教とは、宇宙の中できわめて微弱な存在である私たちが許されて生きているという単純な事実には、眼を向けることである。その事実を語るのに、何ら宗教的教義を持ち込む必要はなく、天文学や生物学のポキヤブラリーで十分である。私が公教育の場でも宗教教育は可能であるというのは、そのためだ。

### 宗教的無関心の国だからこそ

日本は、世界でも冠たる宗教的無関心の国である。私

は大学で宗教学の講義を開いているが、毎学期の冒頭に「あなたは、どのような信仰を持っていますか」という質問を投げかけると、「自分は無宗教である」とか、「自分は無神論者である」という答えが次々と返ってくる。たいてい何人かの市民聴講生が混ざっているが、中高年の彼らさえも、同じような回答の仕方をするので、正直いって驚いてしまう。

日本人の多くは、宗教を誤解している。無宗教であったり、無神論者であったりする人間は、神の存在を否定するのだから、初詣も行かなければ、新車の安全祈禱や、工事の地鎮祭もしない。盆や彼岸の墓参など、もつてのほかである。それらを実践しているからには、何らかの宗教感情を持っている証拠である。立小便や不法投棄の防止に、小さな鳥居を立てておけば効果抜群と聞くが、真に無神論者であれば、そんなものは何の意味も持たないはずである。

ことほどきように宗教に無頓着な国なるがゆえに、かえって宗教教育はやりやすい。これがキリスト教国やイスラム教国であったりすると、そうはいかない。聖書やコーランを離れて、宗教を語るわけにはいかないからだ。日本では絶対視されるような聖典がないから、サイ

エンスやアニメを使っても、宗教的世界を語り得る。

だから、公教育の場に宗教を持ち込めないなどと決めつけないほうがいい。むしろ日本だからこそ、他の先進国の中でも実践されていないような宗教教育が実験できるのではないか。それには、教える側が、宗教への偏見や知識不足を改めておく必要がある。

全国の学校を管理することが得意な文部官僚に、そのへんの認識が不足しているために、妙な宗教アレルギーが存在しているのは、残念なことだ。文科省あたりで、宗教教育の在り方について勉強会を開いてもらいたい。でないと、ますます日本の教育は、おかしな方向に流れていくだろう。

たとえば、子どもたちを靖国神社に連れて行って、ここには日本国のために戦争に出かけて行って亡くなった英霊が祀られているのだから、感謝をこめて手を合わせましょう、というのは、やってはならない宗教教育である。

反対に、戦争中に日本やアジアの国々で起きてしまったことを、できるだけ正確に客観的に教えた上で、戦争の悲惨を語り、その中で命を落としていった何百万人という人間のことを、人種を超えて悼む心を植えつけることは、やるべき宗教教育である。

国旗の掲揚や国歌の斉唱をめぐる、問題がかなり紛糾しており、教育委員会と教員組合の板ばさみになった管理職の先生たちに自殺者が出る始末である。この国の教育政策の愚かさを象徴するような現象と言わざるを得ない。そのようなことを義務づけるのではなく、国民が自分たちの国や文化のことを誇りに思い、それを愛するようになることが先決である。ますます日本嫌いになる人間が増えつつある風潮の中で、国旗を揚げたり、国歌を斉唱させたりすれば、逆効果が生じるだけである。

ブラジル日系人の高齢者層は、日の丸を見たり、君が代を斉唱したりすると、思わず目頭が熱くなるそうだが、国を離れて異郷の地で、辛苦を耐えた人たちだからこそのである。NHKのテレビドラマ『ハルとナツ』とまったく同じ世界を生き抜いてきたという人が少なからずいるブラジルで、日系人たちが故国を思う気持ちには、宗教にも通じる敬虔なものがある。

だからこそ、欲ボケしてしまった日本で、教育の復活を願うなら、やはり「ガマンの日」があってもよいのではなからうか、と私は主張したのである。